

強者の戦略

今回の問題は、与えられた設問に答えるという営みに限って言えば「面白みに欠ける」「強者にふさわしい問題と言えるかどうかは疑問」と言われてしまうかもしれません。ですが、同時に「和訳問題にされたら苦しいだろうな」「もし選択式でなくて記述式だったら苦しいかも…」と思ってもらえるだろうと信じて、この問題を取り上げることに決めました。事実、今回の文章は他大学で和訳問題として出題されたことがありますし、今後の大学入試でこのようなタイプの問題が出題される可能性は低くない、と私はにらんでいます。設問(1)は、本文中から抜き出すのを禁じて自分で考えて答えるようにすれば英作文問題として成立しますし、設問(2)は大学入試センター試験で採用されてもおかしくない形式です。もっとも、問われるポイントが大きく変わるということは、同じ英文が昔と今で全く違う解釈をされるという異次元のパラダイムシフトでもない限りありえないでしょうから、今回の設問で問われたポイントを押さえることには意味があると思います。

前置きはここまでにして、早速問題に取り組んでゆきましょう。なお、今回は和訳問題としての出題ではありませんから、受験の枠をなるべく越えない範囲で、直訳的でない訳になっていることを予めご承知置きください(もちろん、訳自体は池吉のオリジナルです)。

設問(1)は、「本文の第1パラグラフの内容に沿うように」と指示文にあるように、第1パラグラフの内容に従って答えを決めてゆくこととなります。この場合、与えられた英文には先に目を通しておいた方が良いでしょう。前後の文構造から空所にどのような形が入るかは予測できる筈です。まずは最初の2文から。

【設問(1) 1・2文目】

According to the author, there are apparently two kinds of pleasure. The first kind is called “intended” in the sense that (イ).

〈訳〉筆者によると、どうやら2つの種類の喜びがあるらしい。ひとつめの種類の喜びは(イ)という意味で「意図された(喜び)」と呼ばれる。

apparentlyは処理を間違える人が続出する語です。形容詞apparentを「明らかな」という表面的な意味でしか覚えていないと品詞変換による安易な類推から「明らかに」と訳して疑われない人が多いかもしれませんが、実際はこの意味で使われることは多くありません。〈訳〉では「どうやら～らしい」という断定を和らげる働きをするものとして扱っています。空所(イ)は、in the sense thatの直後にあるので文が入ることがわかります。senseは同格のthat節を伴うことが多いという経験的知識がいつでも引き出せる状態になっていることが肝要です。

【設問(1) 3文目】

The second, the “fortuitous” one, is primarily the kind of pleasure that we get quite accidentally, but it also includes all those elements in the first category (ロ).

〈訳〉第二のもの、すなわち「偶発的な」喜びは、主として我々が本当に偶然得る種類のものであるが、それだけではなくその喜びは最初のカテゴリー内で(ロ)全ての要素を含んでいる。

強者の戦略

空所 (ロ) については、現時点では何が入るか断定はできませんが、(ロ) の直前までで文は完成している (欠落要素がない) こと、そして (ロ) の直前に名詞があることには注意すべきでしょう。少なくとも、名詞 (句/節) がこの位置に入ることはなさそうですし、「語数は5語以上 10語以下」という設問文の指示から、形容詞または副詞の働きをする句や節が入る可能性が高いことが予測できる筈です。今回は本文中から答えとなる箇所を抜き出して答える問題ですから、こういった情報も大切なヒントとなります。

【設問 (1) 4文目】

Actually, whenever we plan an intended pleasure, we unknowingly reckon on this additional gain as well.

〈訳〉 実際、我々が意図された喜びを計画する時はいつも、このオマケの喜びのことも知らず知らずのうちに計算に入れているのだ。

actually は、筆者の主張を強調する目的でよく用いられます。this additional gain は、直前までの内容を鑑みると fortuitous pleasure 「偶発的な喜び」を指していると考えられるので、〈訳〉では gain を「喜び」と訳しています。

【設問 (1) 5文目】

For example, every time a traveller plans a trip, he expects some fortuity not only from the unexpected but also from (ハ).

〈訳〉 例えば、旅行者が旅行を計画するときにはいつも、予期していなかった事柄からだけでなく (ハ) からの偶発性を予期している。

5文目は、not only [A] but also [B] 「[A]だけでなく[B]も」の構造が目を引きます。[A]と[B]には文法上対等な語句が入りますが、今回は (ハ) の直前に前置詞fromがありますから、(ハ) は名詞 (句/節) が入ることが分かります。

それでは、本文中から空所に入りそうなフレーズを探してゆきましょう。

【第1パラグラフ 1・2文目】

There are two obvious “modes” of pleasure. One we may call *intended* in that the event which brings pleasure is planned and intended, like the meeting with a lover or the visit to a concert.

〈訳〉 喜びには2つの明確に区別できる「様式」がある。ひとつは、意図された喜びと呼べるものである。というのも、恋人に会ったりコンサートに出かけたりすることがそうだが、喜びをもたらす出来事というのは計画・意図されたものだからである。

1文目の obvious は直訳すると「明らかな」となりますが、明らかなのは2つの喜びの「違い」なので「明

強者の戦略

確に区別できる」と訳しています。2文目は、主節で倒置が起こっていることに注意が必要です。One が目的語、we が主語、may call が動詞、intended が補語の第5文型になっています。関係代名詞節のようにも見えますが、ここを関係代名詞節だと解釈すると One をうける述語動詞がなくなってしまいます。

この2文は、設問(1)の1・2文目とほぼ同じ内容になっていました。先に設問文に目を通しておけば、何が何に対応しているかは一目瞭然でしょう。

【第1パラグラフ1文目】

There are two obvious “modes” of pleasure.

〈訳〉喜びには2つの明確に区別できる「様式」がある。

【設問(1)1文目】

According to the author, there are apparently two kinds of pleasure.

〈訳〉筆者によると、どうやら2つの種類の喜びがあるらしい。

設問の方が少し長くなっていますが、主節の文はほぼ同じ内容です。

【第1パラグラフ2文目】

One we may call *intended* in that the event which brings pleasure is planned and intended, like the meeting with a lover or the visit to a concert.

〈訳〉ひとつは、意図された喜びと呼べるものである。というのも、恋人に会ったりコンサートに出かけたりすることがそうだが、喜びをもたらす出来事というのは計画・意図されたものだからである。

【設問(1)2文目】

The first kind is called “intended” in the sense that (イ).

〈訳〉ひとつめの種類の喜びは(イ)という意味で「意図された(喜び)」と呼ばれる。

2文目は、in thatがin the sense thatにパラフレーズされていることが見抜ければ、(イ)に当てはまるのがthe event which brings pleasure is planned and intended (9語)だと分かるでしょう。その後ろのlike以下は具体例になるので、今回は不要です。

本文に戻りましょう。

強者の戦略

【第1パラグラフ3文目】

The second and much more important kind is *fortuitous*, in that it comes unexpectedly — not only the surprise meeting with an old friend, the sudden beauty of some usually banal landscape, but all those elements in the active intention to have pleasure that were not clearly foreseen.

〈訳〉もうひとつの、そして遙かにずっと重要な「様式」は、偶発的な喜びである。それは、思いがけず生じるという点で偶発的なのだが、旧友と思いがけず会ったり、普段なら見飽きているはずの風景が突然美しくなったりすることだけでなく、楽しく過ごそうと積極的に意図していてもはっきりとは予見されていなかった全ての要素がそこには含まれている。

関係代名詞節の先行詞の判断に注意が必要です。that were not clearly foreseen は、動詞が were になっていることから複数形の可算名詞が先行詞になっていると判断できます。ということは、直前にある pleasure は先行詞ではなく、今回は all those elements が先行詞になります（ここを間違っていると後で痛い目に遭います）。また、intention は動詞 intend to V-「V-するつもりである」が名詞に変化した派生名詞（抽象名詞）ですから、後ろの不定詞 to have pleasure を同格として伴い、「楽しく過ごそうという意図」という意味上のカタマリを作ります。名詞 to V-で同格関係をとる名詞の多くは動詞派生の（しかも目的語に to V をとる）名詞であるということは覚えておきましょう。

以上を踏まえて、設問 (1) の3文目と見比べてみましょう。

【第1パラグラフ3文目】

The second and much more important kind is *fortuitous*, in that it comes unexpectedly — not only the surprise meeting with an old friend, the sudden beauty of some usually banal landscape, but all those elements in the active intention to have pleasure **that were not clearly foreseen**.

〈訳〉もうひとつの、そして遙かにずっと重要な「様式」は、偶発的な喜びである。それは、思いがけず生じるという点で偶発的なのだが、旧友と思いがけず会ったり、普段なら見飽きているはずの風景が突然美しくなったりすることだけでなく、楽しく過ごそうと積極的に意図していてもはっきりとは予見されていなかった全ての要素がそこには含まれている。

【設問 (1) 3文目】

The second, the “fortuitous” one, is primarily the kind of pleasure that we get quite accidentally, but it also includes all those elements in the first category (ロ).

〈訳〉もう1つの「偶発的な」喜びは、主として我々が本当に偶然得る種類のものであるが、それだけでなくその喜びは最初のカテゴリー内で (ロ) 全ての要素を含んでいる。

どちらの文にも all those elements があるので、そこに注目すると (ロ) に **that were not clearly foreseen**

強者の戦略

(5語)が入るとすぐに気付けたでしょう。_(ロ)_の直前が名詞なので、「the first categoryを先行詞とする関係代名詞節が来るのかな」と予測した人もいると思いますが(その着眼点は決して間違っていないですが)、第1パラグラフ3文目との対応関係に注目できていれば、本文のin the active intention to have pleasureが設問文のin the first categoryに対応しているので先行詞はall those elementsになると分かったと思います。

ところで、設問(1)の3文目には本文の3文目にあつた not only [A] but also [B]の構造が見当たらないように見えていませんか? 確かに not only に当たる表現はありませんが、but と also はあります。実は、not only は省略されることがあり、but と also も今回のように分離しているケースがあります。

本文に戻りましょう。

【第1パラグラフ4文目】

In fact, when we plan an intended pleasure we always unconsciously assume that there will be a free bonus of the fortuitous kind.

〈訳〉 実際、ある意図された楽しみごとを計画する際、我々はいつも無意識のうちに、偶発的な種類のオマケ(である喜び)がタダで転がり込んでくるだろうということを前提にしてしまっているのだ。

In fact は、設問(1)の4文目にあつた Actually と同じ働きをしています。そして、これが設問(1)の4文目に対応しています。

【第1パラグラフ4文目】

In fact, when we plan an intended pleasure we always unconsciously assume that there will be a free bonus of the fortuitous kind.

〈訳〉 実際、ある意図された楽しみごとを計画する際、我々はいつも無意識のうちに、偶発的な種類のオマケ(である喜び)がタダで転がり込んでくるだろうということを前提にしてしまっているのだ。

【設問(1)4文目】

Actually, whenever we plan an intended pleasure, we unknowingly reckon on this additional gain as well.

〈訳〉 実際、我々が意図された喜びを計画する時はいつも、このオマケの喜びのことも知らず知らずのうちに計算に入れているのだ。

ここは空所がない部分なので、パラフレーズ関係だけ確認できればそれで十分です。

次に進みましょう。

強者の戦略

【第1パラグラフ5文目】

Our approach is that of the traveller: to the extent that his journey is planned and has definite aims he will get the pleasure intended, but he will also expect a very large content of the fortuitous kind, both in what he intended to happen to him and in what will happen to him by chance.

〈訳〉我々のアプローチは、旅人のそれと同じである。旅人は、自分の旅が計画され、そして明確な目標がある範囲までは、意図された喜びを得ることになるだろう。それだけではなく、旅人は自分の身に起こることを予期していたことと予期せず自分に起こるであろうことの両面から、偶発的な種類の喜びを大きく期待するだろう。

but と also が分離した形ではありますが登場しているので (... , but he will also ...) 直前の文に not only のニュアンスを追加しているのは、第1パラグラフ3文目でも見た通りです。

設問 (1) の5文目と比べてみましょう。

【第1パラグラフ5文目】

Our approach is that of the traveller: to the extent that his journey is planned and has definite aims he will get the pleasure intended, but he will also expect a very large content of the fortuitous kind, both in what he intended to happen to him and in what will happen to him by chance.

〈訳〉我々のアプローチは、旅人のそれと同じである。旅人は、自分の旅が計画され、そして明確な目標がある範囲までは、意図された喜びを得ることになるだろう。それだけではなく、旅人は自分の身に起こることを予期していたことと予期せず自分に起こるであろうことの両面から、偶発的な種類の喜びを大きく期待するだろう。

【設問 (1) 5文目】

For example, every time a traveller plans a trip, he expects some fortuity not only from the unexpected but also from (ハ).

〈訳〉例えば、旅行者が旅行を計画するときにはいつも、予期していなかった事柄からだけでなく (ハ) からの偶発性を予期している。

空所 (ハ) は、他の空所に比べて少し意地悪な作りになっていました。本文では both in what he intended to happen to him and in what will happen to him by chance 「自分の身に起こることを予期していたことと 予期せず自分に起こるであろうことの両面から」となっていたのを、設問では not only from the unexpected but also from (ハ) 「予期していなかった事柄からだけでなく (ハ) からの」と、順番が入れ替わっていました。what will happen to him by chance という誤答を期待してこのすり替えが行われたのかもしれませんが、内容を行ったのでしょう。もちろん、正解は **what he intended to happen to him** (7語) です。

強者の戦略

これで、設問 (1) は全て終わりです。続いて設問 (2) ですが、こちらは本文中の下線部に対応している問題なので、下線部の箇所まで読み進めてから設問に取り組むことにしましょう。

【第1パラグラフ6文目】

In this way (A) we hedge our bets — if the planned pleasures disappoint, there are the unexpected ones, and the other way round.

〈訳〉 このように、我々は自分の賭け金を両方に賭ける。もし計画された喜びが期待外れであっても、そこには思いがけない喜びがあるし、その逆も又然りというわけである。

the other way round は直訳すると「(それとは) 反対に」となりますが、前の文とのつながりで「逆も又然り」と訳すことができます。逆ということは、この文脈ならば「計画された喜び」と「思いがけない喜び」を入れ替えて「思いがけない喜びが期待外れであっても、そこには計画された喜びがある」という意味になります。そしてこれが、下線部 (A) の具体的説明になっています。

以上を踏まえて、設問 (2) の (A) を見てみましょう。

設問 (2) 下線部(A), (B)の内容を、本文の論旨から考えて、最もよく伝える英文を次の(a)~(d)の中から選んで答えよ。

(A) (a) We cannot foresee the future clearly.

〈訳〉 我々は未来をはっきりと見通すことはできない。

(b) We guard ourselves against a total loss.

〈訳〉 我々は全体の損害から自分たち自身を守る。

(c) We can get both kinds in the end.

〈訳〉 我々は結局両方の種類を手に入れることができる。

(d) We avoid making a final decision.

〈訳〉 我々は最終的な決定を下すのを避ける。

(A) we hedge our bets 「我々は自分の賭け金を両方に賭ける」が比喩だということはすぐに分かるでしょうが、何を喩えているのかを突き止めなければ比喩を理解したことにはなりません。本文の論旨に即して考えれば、賭ける対象は「意図された喜び」(the planned pleasures) と「思いがけない喜び」(the unexpected pleasures) であると察しがつくでしょう。ただし、ここで安易に選択肢 (c) に飛びついてはいけません。下線部 (A) の後ろに続く内容からは、どちらか一方は手に入るのだろうということしか読み取れないので、両方の種類の喜びを手に入れられるという選択肢 (c) は誤りとなります。喜びが何一つ得られない状態を a total loss と呼ぶのであれば、それを防いでいるという趣旨の選択肢 (b) **We guard ourselves against a total loss.** は、論旨に合っているとと言えるでしょう。

正解は (b) であるということに対して、次のような反論が来るかもしれません。

強者の戦略

「第1パラグラフ3文目や4文目の内容を読むと、意図された喜びの中に思いがけない喜びが含まれている旨が書かれている。だったら、結局は両方の喜びが得られるという趣旨の(c)は正解ではないか。」

もし本当にそう書かれているのならごもっともなのですが、これは単なる誤読です。第1パラグラフで述べられていた2つの喜びの内容を整理しておきましょう。

意図された喜び (*intended pleasure / planned pleasure*)

- ・計画・意図された出来事によって生じるという点で意図的なもの【2文目】

偶発的な喜び (*fortuitous pleasure / unexpected pleasure*)

- ・思いがけず生じるという点で偶発的なもの【3文目】
- ・予め意図されたものではない喜びは全てこちらに分類される【3文目】

これらの説明は、2種類の喜びが明確に区別できる様式 (two obvious “modes” of pleasure) であるという1文目の内容と整合的です。特に、偶発的な喜びの2つ目の項目、具体的には第1パラグラフ3文目の *all those elements in the active intention to have pleasure that were not clearly foreseen* は、前述の通り構造把握が厄介なことから誤読される危険性が高いです。これを関係詞節の修飾関係を間違っ「はっきりとは予見されていない喜びを持つとする積極的な意図の全ての要素」と読んでしまうと、2つの喜びの違いがあやふやになってしまいます。

そして、その誤読によって生じた傷口は4文目になると致命傷へと悪化してしまいかねません。

【第1パラグラフ4文目】

In fact, when we plan an intended pleasure we always unconsciously assume that there will be a free bonus of the fortuitous kind.

〈訳〉 実際、ある意図された楽しみごとを計画する際、我々はいつも無意識のうちに、偶発的な種類のオマケ (である喜び) がタダで転がり込んでくるだろうということ を前提にしているのだ。

この文が言わんとしているのは、ある出来事によってもたらされる喜びはどちらか一方ではなく両方だと (根拠もないのに) 前提にしている ということです。動詞 *assume* は明確な根拠を伴わないことを暗示していますから、この文から喜びは必ず両方得られると判断するのは明らかな誤読です。この *assume* のニュアンスを取り間違えると、「やっぱり2つの喜びはセットになっているんだ！」という誤解が固まり、選択肢(c)が答えだと思い込んでしまう (まさに *assume* する!) 恐れがあります。いずれも些細なミスに思えるかもしれませんが、実際には致命的な誤読を招いてしまう恐れのある、極めて重要なポイントなのです。

強者の戦略

第2パラグラフに移ります。

【第2パラグラフ1文目】

What is immediately striking about both these modes of pleasure is that they depend very largely on hazard.

〈訳〉このような喜びの2つの様式に関して即座に目を引くのは、どちらの様式も偶然に大いに左右されるという点である。

名詞 hazard は「危険」や「冒険」といった訳になることが多いですが、後続の文の内容から、ここでは「偶然」や「運」という意味合いで用いられていると予測できます。重要なキーワードほどパラフレーズされている可能性が高いため、パッと見て意味が分からなくても続きを読んで意味を予測する習慣をつけておくことが重要です。

【第2パラグラフ2文目～5文目】

A girl may have long planned to marry. But when the wedding is finally present, is taking place, there is a sense of good luck. Nothing has happened, although many things could have happened, to prevent it. Perhaps she may look back then to the chance first encounter with the man who is now her husband; and (B) the basic element of hazard there is overwhelming.

〈訳〉(例えば、)ある少女が結婚することを長い間計画していたとしよう。しかし、結婚がついに現実のものとなり、結婚式が執り行われる段になると、そこには幸運の感じがする。というのも、結婚の妨げとなる事柄が数多く起こることはありえたのに、何一つ起こらなかったのである。恐らく、その時彼女は今や自分の夫である男性との初めての偶然の出会いを回想するだろう。すると、そこにあった偶然性という根本的要素は計り知れないほど大きくなっているのだ。

5文目の最後にある下線部 (B) の構造把握には注意が必要です。表面的に見ると、下線部の最後の **there is overwhelming** が **there** 構文に見えてしまうと思いますが、**overwhelming** を補語とする第2文型の文だと解釈しないと、**the basic element of hazard** が一体何なのかが説明できません(第2文型と解釈するならば、**the basic element of hazard there** が主語となります)。

設問 (2) を改めて見てみましょう。

強者の戦略

設問 (2) 下線部(A), (B)の内容を、本文の論旨から考えて、最もよく伝える英文を次の(a)~(d)の中から選んで答えよ。

- (B) (a) She is finally freed from the anxiety that she felt at the first meeting.
〈訳〉彼女はついに最初の出会いの時に感じたあの不安感から解放されている。
- (b) She is greatly satisfied to know that everything has turned out as she wished.
〈訳〉彼女は全てが自分の望んだとおりになったことを知って大いに満足している。
- (c) She is very happy that she has got over every difficulty.
〈訳〉彼女は全ての困難を乗り越えることができたととてもうれしい。
- (d) She gets a strong impression that she has been lucky from the very start.
〈訳〉彼女は、自分はまさに最初から幸せだったのだという強い気持ちを抱いている。

第2パラグラフの内容を正確に理解できていれば答えは絞れますが、the basic element of hazard there (そこにあった偶然性という根本的要素) が that she has been lucky from the very start (自分はまさに最初から幸せだったのだ [ということ]) に対応していることが分かれば、正解は(d) **She gets a strong impression that she has been lucky from the very start.**だと自信をもって答えることができたと思います。

最後の1文です。

【第2パラグラフ 6文目~7文目】

In short, we are conditioned to see pleasure of both kinds as very largely a result of hazard. We do not arrive at it so much as it arrives at us.

〈訳〉つまり、我々は両方の種類の喜びを、大部分は偶然の結果であると考えざるを得ないような状況下にあるのだ。我々は喜びに辿り着くというよりむしろ、喜びが我々の元へと訪れるのである。

筆者の最終的な結論は、「意図された喜びは偶然意図されたとおりに事が運んだから得られたのであり、偶発的な喜びはそもそも偶然の産物である、つまりどちらの喜びも大半は偶然の結果である」というものでした。だからと言って2つの喜びを区別することが無意味だと言っているわけではないので、そこは誤解しないよう注意しましょう。

いかがだったでしょうか。今回は「偶然か必然かなんて相対的なものでしかないのでは？」という揺さぶりから始まり、問題文で「意図された喜びも偶発的な喜びも、結局は偶然の産物では？」と揺さぶられるという展開になりました。もっとも、私はこの問いかけに明確な答えを持っているわけではありません。普段何気なく用いている言葉が真に意味するところを掘り下げると、思いもよらなかった深淵が垣間見えるかもしれない…そのことを貴方に感じてもらえれば、今回はそれで十分です。

それでは、また次回お会いしましょう。